



10代・20代は波乱万丈でいい。

チャンスを活かしてみせる。ピンチもチャンスへ変えてみせる。



水上 理玖 Riku Mizukami 心理・人間文化コース 4年

Profile カリフォルニア州ロサンゼルスで生まれ、高校までをアメリカで過ごす。帰国し東京インターハイスクールを卒業後、入学。入学前から軽井沢の星野リゾート「星のや軽井沢」でアルバイトを始める。就職は日本でのホテル業か起業か、アメリカへ戻るかを検討中。現在は前橋市内のシェアハウスに住んでいる。

僕のこれまでの人生 — シャイだったアメリカ時代と入学のきっかけ —

僕の父親と母親はそれぞれが独身時代にアメリカで仕事をしていて、アメリカで出会ってアメリカで結婚したんです。今の僕はいろいろなプロジェクトのリーダーやオブザーバーを兼務する行動力や積極性が伴ってきたけど、アメリカではアジア系の典型的なシャイ気質で、全くリーダーになるような少年ではありませんでした。大学では英語で心理学を学びたいと思っていたので、ワシントン州のシアトルの大学に願書を送って、入学が決まっていたのです。それが、入学直前にシアトルで銃乱射事件が起きました。銃社会のアメリカとは言え、両親の心配もあり大学は日本に戻ろうと決めました。調べたところ、英語と心理学の両方が学べる共愛学園前橋国際大学を見つけました。オープンキャンパスに参加し、入学を決めました。



カリフォルニア州サンディエゴにて小学生の頃の写真。プロのパイロットと飛行する体験を父親が僕と弟にさせてくれました！

「学費400万円で4年間何をする？」教授の問いかけがエンジンになった

父親の方針で、学費も生活費もアルバイトでやりくりすることがルール。大学1年生の「キャリア・プランニング」という最初の授業で、ゼミの教授でもある奥田先生が「君たち、400万円で何をするの？」という問いかけに衝撃を受けました。そうだ、やらなきゃ、動かなくちゃ、自分のお金で自分を奮い立たせなくちゃ、と思い始めました。授業やゼミだけでなく、群馬県の「今から未来をプロジェクト」で少子化や結婚率の低さのワークライフバランスについて議論したり、前橋市の地域連携プロジェクトで慶応義塾大学の学生と協働で調査したり、コロナ禍になってからは大森学長の発案で学長と学生が一丸となってWithコロナのNew Normalの大学を作り上げていくというプロジェクトのリーダーにも抜擢されました。



群馬県の「今から未来をプロジェクト」

半径500mに挑戦するのではなく、半径5万Kmに挑戦してみよう

これも奥田先生の言葉。大学3年生の時、数々のプロジェクトに携わって少し調子に乗っていた僕に先生が言ってくれた言葉。限られた場所で力を発揮して得意気になるのではなくて、地球を一周するような規模で挑戦してみよう、世界を見てみよう、そんなメッセージだと思うのです。僕も今、高校生へ伝えたい。「スマホの中が全てじゃない」。この記事もスマホで見られていると思う。でも、そこから外へ出て、体験を重ねてほしい。インスタもLINEもYouTubeも、そこでどんなに知識や情報を得たとしても、体験には勝てません。



前橋市の地域連携プロジェクト 今年リーダーに着任しました

2週間で2回死んでもおかしくなかった。でも生きています。人間は簡単には死なない。

昨年10月に2週間で2回も交通事故に遭いました。1回目は自転車、2回目はバイク、2回とも車に衝突されました。自転車もバイクも大破。もちろん大怪我を負いました。そのせいで年末にかけて落ち込んで、そのままコロナ禍に突入り、暗い時期を過ごしました。でもふと気付いたんです。あれ、人間って、なかなか死なないものだなと。僕は簡単には死なない人間なんだ、と。そこからです。命の続く限り自分の可能性を信じてみようと思ったのは！